

# 自己肯定感を高める児童の育成について

## —道徳における対話的な学びを中心とした指導の在り方—

鈴木 由佳(2022)

### 1. はじめに

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うための道徳の授業実践に焦点した積み重ねを基に、児童の自己肯定感を育むことを今日の重要課題と考え、本主題を設定した。昨年度は自己肯定感を高める授業づくり・学校づくりについて理論的考察を行い、より良い道徳の授業の在り方を検討した。今年度は勤務校で、道徳に主軸を置いた学級・学年経営を基に、道徳推進教師としての校内での実践を行い、道徳を通し「伝え合い かかわり合い 認め合う子の育成」を主題とする校内研究に資することを企図した。これらの実践がどのように児童の変容に影響してきたかを検証すると共に、教師側がどのような意図や思いを持ち、道徳の授業実践を行う必要があるのか、指導の在り方を明らかにし、本主題の実現を目指す。

### 2. 研究の目的

他者との対話や関わりを通して、自分の考えを深め広げたり、思いが相手に認められたりすると喜びや自信につながると考える。ここでは、自己肯定感を高める児童の育成について、道徳における対話的な学びを中心とした指導の在り方を明らかにしていく。

### 3. 研究方法

- (1) 児童と学年・学校組織に関する実態分析(1年次)
- (2) 自己肯定感を高める授業づくりに関する理論的・実践的考察(1年次)
- (3) 児童の実態に基づく学級づくり・道徳の在り方
- (4) 聞く態度の育成を主軸とする授業実践
- (5) 学年経営としての学年道徳や交換授業による授業改善
- (6) 学校づくりとしての道徳推進教師の働きかけ

### 4. 研究成果

- (1) 児童と学年・学校組織に関する実態分析

学力低下や不登校、いじめ問題などの問題が起こる背景に児童らの自己肯定感の低下が関係していると考えられる。勤務校の児童らも、様々な課題を抱えており、4月に行ったアンケートでは学級の児童の4分の1が「自分にはよいところがある」という項目に対して「どちらかといえばそう思わない」と答えている実態が明らかになった。

#### (2) 自己肯定感を高める授業づくりに関する理論的・実践的考察

理論的な考察から、自己肯定感を高めていくためには、自分自身、他者、教材との対話が重要であることが分かった。これらを踏まえ、実習校では対話を意識した授業実践を行い、話し合いを通してお互いを認め合うこと、その話し合いに必然性があるように発問の工夫をすることが重要であるという小結に至った。

#### (3) 児童の実態に基づく学級づくり・道徳の在り方

児童らの実態としては、素直で活動的であるが、発表したことをただ言い合うことになりがちであり、まずはお互いを認め合うために、落ち着いて他者の話を聞き、仲間の考え・意見・気持ちに思い至るように、聞く態度を身に付けることから始めることが必要であると考えた。

年間の学級経営の見直し、その中で道徳において、児童の実態や、学校行事などと照らし合わせて内容項目の配列を見直し、授業を実践していくこととした。

#### (4) 聞く態度の育成を主軸とする授業実践

##### ①「聞く」ことに重点をおいた話し合い活動

道徳を中心にペアやグループでの話し合い活動を意識して取り入れてきた。発表したことをただ言い合う時間になってしまっていたので、特に「聞く」ことに特化して傾聴することの大切さを指導した。「相手の顔を見る」「頷く」「相槌を打つ」などの基本的事項を掲示物でも示し、いつでも確認できるようにした。

よく「聞く」ことで、相手の良い考えを理解して周りに紹介したり、以下の例示のように、ワークシートに他の児童から受けた影響を記述したりする児童が増えた。

【内容項目・親切, 思いやり—授業実践 4月 21日】

「いろんな人がいいことを言っていて、考えてないこともいろいろあって、道徳はあまり好きじゃなかったけど、次の道徳がすごく楽しみになった。」

【内容項目・生命の尊さ—授業実践 5月 16日】

「心に残った文が人それぞれちがっていて、いろんな人の意見を聞いてみたいと思った。」

また、教師対児童の対話として、「問い返し」や「揺さぶり」の発問を意識して取り入れた。問題場面を多面的・多角的な角度から捉えることで、考えが深まったり、広がったりする様子が見られた。

【内容項目・友情, 信頼—授業実践 6月 21日】

「自分も悪口を言った時、軽い気持ちで言ってたんじゃないかと思った。これからは、人を大切に思いながら生活していきたいと思った。」

話し合いで考えを深め、広げることは、自己肯定感の高まりに繋がる土台の一步になると考える。

②話し合いが活発になるための授業デザインの工夫

i 板書の工夫

教材に合わせて内容を構造化するなど板書の工夫を行った。対立した構図や心情曲線、スケールなどを使い、児童と一緒に作り上げる板書づくりを意識した。

ii 振り返りの材料の吟味

授業内容をいつでも想起できるように、廊下にこれまでの道徳の授業の内容項目等を教材ごとにまとめたものを掲示した。加えて、毎回使用するワークシートと共に、他の児童の感想を抜粋したものを道徳ファイルに蓄積することで、これまでの道徳の授業の振り返りがいつでもできるようにした。

iii p4cの採用による自己開示や話し合いの活発化

対話の楽しさや意義を感じさせるために、学級活動の時間にp4cを行った。普段挙手をしない児童が積極的に自分の意見を述べようとしたり、相手の考えを聞こうと前向きな姿勢を見せたりする姿が見られ、「対話」の楽しさを感じ取る児童が増えた。

③児童へのアンケートの実施

4・7月、1月に行った道徳に関するアンケートの結果を比較すると、道徳の話し合い活動において「安心・安全な雰囲気です話することができる」が 56.6%から 64%（そう思う、どちらかといえばそう思う・以下同様）に、「友達

の考えを受け止め、自分の考えをしっかりと伝えている」が 88.7%から 96%に、「違う意見について考えるのが楽しい」が 83.1%から 88%に増加した。他の人の意見を知ることの楽しさや、話し合い活動の意義を感じ取ることができていることがうかがえる。また、道徳に関する印象を文章で聞いた項目では、4月の段階では、「道徳はきらい…考えるのが苦手だし、書くことがめんどくさい」と記述していた児童が1月には「道徳はおもしろい…いろんな人の意見が聞けるから」と変容していた。また、同様に、別の児童は、「道徳は眠くなる…読むと疲れる」という記述から、「道徳は楽しい…読むのが楽しい」と変容していた。4月と比べて、「話し合いが楽しい」「みんなの意見を聞けるし、人それぞれの意見があるから」「みんな考えが違うから」などと、話し合いのことについて肯定的に記述している児童が増えた。AI テキストマイニングツール UserLocal のワードクラウド<sup>1)</sup>で比較すると、1月では中心に「話し合い」の単語が出現する。この1年で、対話を中心にした授業改善のねらいが児童に浸透しつつあることが分かる。その一方で、アンケートの項目で、道徳の話し合いでは「友達の話や意見を最後まで聞くことができる」が 94.1%から 80%に減少し、「自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」が 81.1%から 88%に増加したものの、今までいなかった「そう思わない」が 12%増えた。「聞くこと」や「対話の意義」について、成長につれ、自分ができないことへの認識が明らかになり、自分自身を客観的に分析できるようになったと考えられる。また、本研究の主題にもある「自己肯定感」の高まりについては、アンケートの2項目から読み取れた。一つは「自分にはいいところがあると思う」で、4・7月と1月を比較すると 79%から 82%に増加した。もう一つは、「自分のいいところを周りから認められているか」で、同様に 74%から 87%に増加した。4月からの実践が少なからず、自己肯定感の高まりに影響を及ぼすことができたのではないかと考える。

(5) 学年経営としての学年道徳や交換授業による授業改善

①担任同士の交流

限られた時間の中で、学年で道徳の教材研究を共に行うことは現実的に難しい。そんな中、学年内での普段の会話の中に道徳の話題を意識して取り入れてきた。

自分のワークシートや参考資料を示したり、それぞれの授業の感想や手応えなどを気軽に話し合える雰囲気づくりを行ったりした。

## ②学年授業の実施

11月に行った学年授業では、自分がT1を行い、他の2人の学級担任は範読や声掛けを行うなど、T2の役割を担った。自然と道徳の授業に関する話題が増え、意識せずとも教材研究の時間になることが増えた。他の学級の状況や児童の様子を知る機会になり、風通しの良い学年経営にもつながった。そして、何より、共に学び合おうとする教員の意識が高まったことで、互いに影響や刺激を受け、より良い授業づくりへの関心が深まった。一方で、学年授業の際、教師主導の授業にならないように留意しているにもかかわらず、自分の考える流れに方向付けるために、児童の意見を流してしまう場面があったり、発問に対して静まり返った場面に焦ってしまったりした。児童との空気感をうまくつかみ、授業をファシリテートすることの大切さを再認識した。学年授業での成果や課題について学年で話し合った記録や、教師間の学び合いや児童理解の深まりについての意義や成果をもっと校内で共有することで、学校全体への影響が深まると感じた。

## (6)学校づくりとしての道徳推進教師の働きかけ

### ①研究授業の学びを校内で共有

勤務校の研究教科が道徳ということもあり、研究主任と連携を深め、道徳推進教師として校内の道徳教育をリードすることを心掛けてきた。

中学年部の代表の授業者を率先して引き受け、11月に研究授業を行った。教材には「SL公園で」(A 善悪の判断、自律、自由と責任)を選んだ。目指す児童像に向けた指導の手立てとして、「手立て1 ワークシートの工夫」「手立て2 話し合い活動の工夫」と2つの手立てを設定した。手立て1では、スケールを用いて自分の立場を明確にしたり、中心発問で自分の考えを書いたりできるような自作のワークシートを用いた。裏面は4月から継続して同じ形式の感想を書く枠のワークシートを使用してきた。価値理解・他者理解・人間理解・実践意欲について児童が感想を書けるように、裏面上部にポイントを示したものである。手立て2では、担任と児童とのやりとりの中で、中心発問以外にも「問い返し」や「揺さぶり」の

発問を意識して行った。また、ペアでの話し合いを取り入れ、自分の考えを相手に伝える機会も取り入れた。自分の考えを話す際に、相手が「傾聴」してくれると、自分が受け入れられたと感ずることができる。教室の掲示物も活用したこのような手立ては、「対話的な学び」を意識する本研究とも大きくつながりを持つ実践だと考える。

本時では、いつもと違う環境に緊張する児童の様子が見られた。普段の自分たちの実態を想起させ、「揺さぶり」の発問を行うことで、本音を引き出すことができたように感じる。また、最後に「正しいことをするために大切なこと」を問う際に、他の学級ではあまり意見が出てこなかったため、「人間の弱さ」をより意識させる発問を行った。

T : しんごはどうしてみんなを止められなかった？

C1: 勇気がなかった。

C2: みんなに嫌われるかもしれないと思った。

T : さっき、みんなが言っていた楽しそうだから流されてしまうということも含めると、こういうところって、人間の…？

C3: 弱いところ。

T : 「正しいこと」をするために大切なことは？ 弱いところの反対のことかな。

C4: ルールを守るという強い心。

C5: みんなが悪いことをしているときに勇気を出して注意する。

C6: 正しいことをするという自信を持つ。

C7: 誘われても自分で考える。

T : ちゃんと自分の考えを持つということだね。

児童らの意見を黒板にまとめ、構造化を意識したことで、感想を書く際に振り返りやすい板書となった。また、継続の意義も大きいと感じるが、4月当初はワークシートに何を書いたらいいかわからなかったり、2~3行しか書けなかったりする児童らが、ほぼ全員、枠の一番下まで自分の考えを記述できるようになった。実生活でよく友達に流されている様子が見られる児童は「今まではいろんな人に流されやすかったけど、もう流されないようにする。誰かが悪いことをしていたら、勇気を出して注意する。」と記述していた。また、いつもあまり記述ができない児童は「これからやっている(良くないことをしている)人を見つけたらやさしくダメだよと言う。友達に流されて

言う通りにしない。道徳の授業を生かして、（良くないことをしている人を見つけたら勇気を持つ。」などと、自分なりの言葉でたくさん記述することができていた。

意見の発表の際に「隣の人の発表がいいと思ったから紹介したい。」という発言があった。きちんと相手の話を聞いているからこそその発言である。聞くときのポイントを掲示していることで、児童にその姿勢が浸透していることが分かった。検討会では、自分の学級や学年でも相手の話す中身について、質問したり、同意や反論を示したりするなど、「対話」の深まりを意識させることを大切にしたい授業を実践していきたい、といった声が聞かれ、会の学びが着実に広がっていることが感じられた。道徳推進教師として、話し合い活動における、「対話」のポイントをもっと明確に示し、引き続き、授業実践を通して校内で吟味・検証していきたい。

## ②道徳の授業改善への意識づけ

研究授業以外での道徳推進教師としての校内での取り組みとして、校内の教員に向けて道徳便りの発行や道徳に関するアンケートを実施し、現状の分析などを行った。5月に教職員に道徳の授業に関するアンケートを行い、8割の教員から回答を得た。その結果から、教員らの道徳に関する意識や課題などを明らかにし、どのような情報を知りたいかについて把握した。道徳便りでは、児童の実態と教員からの要望や悩みに答える形として、年5回発行した。道徳の授業を実践するにあたり、その目標や、道徳における「対話」の意味など基本的事項を簡潔にまとめたもの、板書のマンネリ化に対する方策などを内容とした。若手教員がお便りを読み返している姿もあった。詳細を教えてほしいという依頼もあった。管理職からも継続を期待されるなど、学校全体の道徳教育についての意識喚起に寄与したと感じる。

## 5. 考察

学級アンケートでは、ほとんどの児童が道徳に関して肯定的な思いを持っていることが分かったが、「道徳は楽しくない…言葉を間違えたりすると、笑われそうと言いたいことが言えない」「人の気持ちを考えるのは難しい」と回答している児童もいた。個別に話を聞いてみると、話し合いのメンバーに左右されうまく活動が出来なかったり、実際に相手に笑われそうになった経験があったり

したらしい。本音で話し合うこと、相手の気持ちを考えながらしっかりと聞くことの意義を、繰り返し伝えながら授業実践を行い、自己肯定感の育成に努める必要性を再認識した。

この2年間は、目の前の児童ときちんと向き合い、共に授業をつくり上げるという姿勢を特に意識して行ってきた。「対話」の大切さを意識させ、どんな考えも肯定的に受け止めて皆で考えさせることを学級経営の中心に据えてきた。アンケートの「失敗にも恐れずに挑戦する」「他の人を進んで助ける」「人の役に立つ人間になりたい」「やればできる」「間違いや失敗は大切なこと」「このクラスはどんなこともやればできる」という項目で、4月は「そう思わない」と回答していた2名の児童がいたが、1月にはゼロとなった。道徳に主軸を置いた学級経営が児童の変容に大きく影響したことがうかがえる。

また、学校全体として育てたい児童像を念頭に置き、学校教育目標を実現するために各々の教師が切磋琢磨して伸びようとするのがとても大切であることを再認識した。そのためには、教師の意識改革と共に、研究授業の時だけに限らず、普段の会話の中に話題を意識して取り入れることで、共有し合うことができるし、学年授業や交換授業などを積極的に行うことで、自然と学び合おうとする意識が生まれることが分かった。

児童の自己肯定感を高めるためには、教師集団、もしくは学校全体が一丸となって児童を育てていくという方向性を一致させる必要性を改めて感じた。今回は、その中の最小集団である学級で、道徳を中心にした学級経営を軸とし、学習したことを意図的に振り返らせながら実践意欲につなげてきたわけだが、研究は試行錯誤の過程の途中にある。あくまでも、道徳を要とした全ての学校生活の中で児童を育てていくことの大切さを感じた。どの児童も「成長したい」「良くなりたい」という思いを持っている。その思いを自覚させるためには、道徳は特に有効な教科だと考える。今後も、児童との「対話」を重視し、児童の思いや考えを大切に取り上げる授業を通して、相手に認められる喜びを実感し、自分に自信を持って行動できるような児童の育成に努めていきたい。

## 引用・参考文献

1) <http://testmining.userlocal.jp> (2024年1月13日現在)

# 自己肯定感を高める児童の育成について

## —道徳における対話的な学びを中心とした指導の在り方—

鈴木 由佳(22022)

### 要旨

児童の自己肯定感を育むことを今日の重要課題と考え、道徳に主軸を置いた学級経営を基に、道徳における対話的な学びを中心とした指導の在り方を明らかにしようと実践を積み重ねた。「聞く」ことや「対話」の意義を中心に、「問い返し」や「揺さぶり」などの発問の工夫、構造的な板書などの授業改善を行った成果が、児童の自己肯定感の高まりに影響を及ぼしたことが、アンケートの結果により明らかになった。また、学年授業などを行ったり、道徳推進教師として校内の道徳教育をリードしたりすることなどを通して、児童の自己肯定感を高めるためには、教師集団、学校全体が一丸となって児童を育てていくという方向性を一致させる必要があることを再認識した。今後も、児童との「対話」を大切に取り上げる授業を通して、相手に認められる喜びを実感し、自分に自信を持って行動できるような児童の育成に努めていきたい。

キーワード:道徳, 対話, 自己肯定感, 話し合い, 聞く

ユニット指導教員(◎ユニット長, ○副ユニット長)

◎佐々木孝徳, ○田端健人